

## 松井繁先生を偲んで

林田 恒夫

085-0011 釧路市旭町23番地4

松井先生の電話での「はい、松井です」の明るい軽やかな声が聞かれなくなってから一年になろうとしています。私の中では未だに電話をすれば何時でも「あの声」が聞かれるように思っています。

先生は“白鳥の松井”と云われ白鳥の写真家として有名ですが、私が先生とお会いしたのは1962年(昭和37年)1月に阿寒町の故・山崎定次郎さん宅(現阿寒国際ツルセンター)です。家の前に当時話題になった三菱自動車が生産した500ccの小型の普通自動車コルトが止まっていた。自家用車で来ている人はどんな人だろうと思いながら家に入ると、そこに居合わせたのが松井先生でした。私はその年に鶴に魅せられ撮影を始めたのですが、1960年頃から網走から年に数回は撮影に来ていたそうですから、私より鶴の撮影は早く、おそらく“白い鳥”に魅せられていたのではないかと思います。

医業が忙しく遠出が出来にくくなり、地元の涛沸湖の白鳥を撮影しているうちに白鳥に魅せられていき、1963年3月の涛沸湖全面結氷による餓死の白鳥を目にしてその保護に手を差し伸べると共に、白鳥が愛しい白い鳥になったように思います。

1964年に札幌で病院を開業してから、別海町尾岱沼の野付湾に大集結する白鳥を撮影するため、冬夜汽車による札幌から尾岱沼通いが始まり、1965年2月に二度ほど同行して撮影したことがありましたが、それはそれは楽しげでした。その時と日本野鳥の会と北朝鮮との“鳥の交流”で代表団に先生と私が加わり1991年3月と11月に二度一緒に北朝鮮に行きましたが、11月の時ピョンヤン郊外で川にオオハクチョウが5羽おり、初めて出会った外国での白鳥に大喜びで撮影していた姿が忘れられません。

先生の業績を考えると、白鳥の保護のために愛護者ばかりでなく研究者を参加させて学術的裏付けを考えた「日本白鳥の会」を設立したこと、さらに白鳥は渡り鳥であるから国内だけの保護ばかりでなく生息地や渡り中継地の保護を考え“水鳥と湿地保護のためのラムーサル国際条約を提唱した国際NGOのIWRB(国際水禽局)の日本委員会を創立したこと、1981年には日本白鳥の会会長、IWRB日本委員会会長に就任して、長く国内外の白鳥や水鳥に保護に尽力されたことがあります。

忘れてならないのは、先生の努力で日本での初めての水鳥保護の国際会議が札幌で1985年2月開かれたことです。「白鳥と鶴のシンポジウム」と名づけて開かれました。20ヶ国から150人の研究者や関係者が来札して、1週間熱心に会議が行われました。その恩恵で世界の鶴の状態がわかり、私にとって先生が世界の鶴の私の撮影に道をつけていただいたと感謝しています。

私の中には何時も先生は生きており、先生を見習って鶴の保護に努力して行きます。